

まちづくり ひろしま

第48号 (令和2年7月15日)

読者数：648名 (募集中)

メール：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp

HP：<https://machizukurihiroshima.web.fc2.com/index.htm>

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

新型コロナとうまく付き合っ乗り越えていこう！



○巻頭言
和解のブロンズ像



○ひろしまのまちづくりの動き
2代目平和の鐘脇の平和軸



○ひろしまのまちづくりの動き
平和記念公園レストハウス
3階展示室



○街角ウォッチング
クリスタルプラザの前庭

目次

- 巻頭言：ライ麦の種で平和のパンを一負の遺産の保存と継承
..... 元広島市立大学学長 藤本黎時
- ひろしまのまちづくりの動き
 - ・ひろしまはなのわ2020メイン会場終了、一部再オープン！
 - ・平和記念公園レストハウスのリニューアルオープン！
 - ・お知らせ：令和2年 響け！平和の鐘祈念式..... 実行委員会 高東博視
- 広島復興の軌跡・人物編：戦後日本の保健衛生行政に関わり、広島復興過程に
足跡を残したサ姆斯准将..... 編集委員 石丸紀興
- ほっとコーナー：社会的距離と家族的距離..... 天 Writers 築島 涉
- 広島市中央公園を考える⑮..... 中国セントラルコンサルタント 前岡智之
- 街角ウォッチング：平和大通りを歩く..... 建築士 瀧口信二
- お知らせ：被服支廠を未来に活かす会 キックオフ イベント
- 編集後記..... 編集委員 前岡智之

□ 巻頭言

ライ麦の種で平和のパンを一負の遺産の保存と継承

元広島市立大学学長 藤本 黎時



第二次世界大戦で敗戦を喫したドイツは、強制収容所など先の大戦の負の遺産を立派に整備し、保存しているが、さらに、戦後の冷戦期の東西分割を記念する負の遺産についても、歴史を後世に伝え、風化させないための努力を続けている。

冷戦期のベルリンの東西分割を記念する負の遺産としては、アメリカとソ連統治地区の国境検問所跡の「チェックポイント・チャーリー」や、東西分割の壁に描かれた「イーストサイドギャラリー」などがあるが、ここでは、ベルリンの壁記念施設 (Gedenkstätte Berliner Mauer) について紹介したい。

戦後の冷戦下、東西陣営に分裂していたドイツでは、ベルリン市内の境界線を経由して東側から西側への人口流出が続いた。そこで、東ドイツが自国の体制を守るために、1961年8月13日、突如として東西ベルリン間の通行をすべて遮断し、西ベルリンの周囲を高さ約3.6mのコンクリートの壁で囲った。壁は、1989年11月に崩壊・撤去されるまで東西分断の象徴であり、東西冷戦の象徴であった。

2011年秋、1か月余、ドイツとオランダの都市をバックパッカーした時、ベルリンにしばらく滞在して、ベルリンの壁記念施設を訪ねた。9月15日午前9時過ぎ、ベルリン中央駅から約7分電車に乗って北駅 (Nordbahnhof) で下車すると、目の前にベルナウアー通り (Bernauer Straße) に沿って芝生の広場が広がっている。東西ベルリン分断の壁が撤去された跡である。

広場を行くと、人の背丈くらいの高さの赤さびた鉄柱群が目にとまる。鉄柱のボタンを押すと、ブラント首相の演説などが聞こえてくる仕組みになっている。

また、壁を越えて亡命しようとして射殺された犠牲者の顔写真が飾られた記念碑が立っている。大きな鉄製の衝立が下駄箱くらいの大きさの枠に仕切られ、その枠に1人ずつ犠牲者の顔写真が飾ってある。衝立の記念碑は野ざらしで雨にぬれるままである。

広場の中央辺りには、もともと1894年建築の和解教会 (Versöhnungskirche, The Church of Reconciliation) という名称の煉瓦造りのネオ・ゴシック様式の教会が建っていた。信徒たちはフランス統治地区の住人だったが、和解教会はソヴィエト統治地区に位置したため、1961年、壁が建設されると、東ドイツの監視兵以外は近づけなくなった。壁建設直後は、多くの人が教会の傍の建物の窓から飛び降りて西側に逃げることはできたが、やがて壁の窓はコンクリートで塞がれた。その後、壁が崩壊・撤去されるわずか4年前の1985年、警備上という理由で、教会は東ドイツ政府によって爆破され撤去された。

現在は、爆破・撤去された教会の跡に、和解礼拝堂 (Kapelle der Versöhnung, The Chapel of Reconciliation) という名称の小さな長円形、卵型の礼拝堂が再建されている。

礼拝堂に入ると、受付のボランティアらしい若い女性が流ちょうな英語で「どこから来ましたか？」と訊くので、「広島から」と応えると、礼拝堂の外にある「和解のブロンズ像」(Reconciliation) と同じブロンズ像が、広島にもあるはずだと教えてくれた。外に出て、男女が肩を寄せ合った和解を象徴する等身大のブロンズ像を見つけた。「和解のブロンズ像」の足元には切断された有刺鉄線が置かれていた。ブロンズ像は、東西ドイツ再統一を表わしており、有刺鉄線は壁の崩壊を表わしているのであろう。(注)

和解礼拝堂と「和解のブロンズ像」の両サイドには芝生がない地面が広がり、土を耕したあとが見えた。自動車が頻りに往来する大通りのそばに出現する畑は不思議な光景で、壁が撤去されたまま残された未整理のスペースのような印象を受ける。受付の女性の説明によると、2005年、緩衝地帯の一部を次のような目的でライ麦畑にしたとのことであった。

ライ麦は寒さに強く、痩せた土壌でも成長しやすい。10月頃蒔かれた種はやがて葉を出し、冬を越して花を咲かせる。翌年の7月頃、黄金色に輝く麦穂を収穫する。その種は、冷戦時代の苦難の歴史を経て国連に加盟したバルト3国からブルガリアまでの東欧12か国へ送られる。そこで



ベルリンの壁記念施設全貌



和解のブロンズ像

蒔かれて育ったライ麦の粉を、壁崩壊 25 周年の 2014 年にベルリンへ運び、和解礼拝堂のライ麦の粉と混ぜあわせて「平和のパン」を焼く計画である。

パンは、私たちのお米のように、ヨーロッパの人々にとっては主食と言ってよい。イエス・キリストの最後の晩餐に由来する聖餐式では、信徒にパンと葡萄酒が授けられる。パンはキリストの体の象徴である（マタイによる福音書第 26 章参照）。また、イエスは、「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。」と言われた（ヨハネによる福音書第 12 章 24 節）。

今なお世界の各地で戦いが続き、食糧が不足して飢餓に苦しんでいる多くの人々がいる。平和を取り戻すことによって、飢えを耐えしのいでいる人々は、飢餓を脱することができるだろう。そういう意味でパンは平和の原点である。13 か国で育てたライ麦の粉で作った「平和のパン」は、和解礼拝堂での記念式典において、世界平和を願う祈りとともに聖餐式で供されたことだろう。

「平和のパン」を焼く計画は、負の遺産としてのベルリンの壁跡を保存し、継承していく目的のみならず、将来に向かって積極的に平和をつくり出す意志の表れである。「平和をつくり出す人たちは、幸いである、彼らは神の子と呼ばれるであろう。」（マタイによる福音書第 5 章 9 節）

広島にも、最近話題になっている旧日本陸軍名残の「旧広島陸軍被服支廠」の 4 棟をはじめ、いくつかの負の遺産がある。9 年前に聞いた「平和のパン」の話は、被爆体験を語り継ぎ、負の遺産を保存し、継承していく責務を負っている私たちの今後の活動への示唆を与えてくれる。

（注）イギリスの女流彫刻家、ジョセフィーナ・デ・ヴァスコンチェロス (Josephina de Vasconcellos, 1904 - 2005) の作品。広島市と友好関係にある英国コベントリー市民を代表して、イギリスの実業家、リチャード・ブランソン氏 (Richard Branson, 1950～) によって寄贈され、広島平和記念公園内の国際会議場入り口に設置されている。

ひろしまのまちづくりの動き

① ひろしまはなのわ2020メイン会場終了、一部再オープン！

全国都市緑化フェア「ひろしまはなのわ2020」は、旧市民球場跡地のメイン会場を5月24日に終了したが、一部期間限定で開放。会場外周の立体花壇は新たに「わがまち自慢花壇」が設置され、平和軸線上の希望と思い出ゾーンも今しばらく残される。

新型コロナウイルスの感染防止により、多くのイベントが中止されたためイベントエリアの芝生広場や各種のPRブースは閑散としていたが、広島海から山までの多彩な風景を表現した「ひろしま百景花壇」は人や動物、風景などに花や緑を植え込んだランドアートで来場者の目を楽しませていた。

一番印象に残ったのは平和記念公園の慰霊碑から原爆ドームを貫く平和の軸線上に設けた「未来に向けた思い出年表」である。園路沿いに被爆した1945年から100年後の2045年までの復興の歴史とこれからのビジョンをパネルにして展示。

ゴール近くには国連が定めた2030年までに達成すべき「持続可能な開発目標 (SDGs)」が大きく掲げられていた。

ゴールの先には「2代目平和の鐘」がたたずんでいる。1949年の第3回平和祭に1度だけ打ち鳴らされ、その後長い間忘れられていた鐘を被爆70年の2015年に有志によって復活。

以後、毎年8月6日に細やかな祈念式が開かれ、鐘が鳴らされている。メイン会場開園中は道行く人が感慨深げに鐘を打ち鳴らしていた。

今回は新型コロナウイルスのため、花や緑の大切さと平和の尊さを発信するフェアとしての効果が十分に発揮できなかったが、逆に日常の平和と健康の有り難さが身に染みる。

現在、県内のマスコミ・広告業界・経済界が一丸となってコロナに負けないために、地域支援プロジェクト「#輪になれ広島」を推進しているが、「ひろしまはなのわ」の精神に通じるものがある。



球場跡地メイン会場パース



2代目平和の鐘脇の平和軸



原爆ドームに向けた軸線

② 平和記念公園レストハウスのリニューアルオープン！

7月1日に平和記念公園のレストハウスが2年半ぶりに装いを新たにオープン。外観は極力被爆前の姿に戻し、内部は休息エリアと展示エリアを充実させている。

1階は従来通り案内所と売店、2階は休息・喫茶ホールで一角に被爆ピアノを設置、3階は旧中島地区の移り変わりやレストハウスの建物の歴史を展示、地下1階は被爆直後の状況を保存展示。建物の南側にトイレやエレベーター、階段などを別棟で増築してバリアフリー化に対応している。

平和記念公園内に残る唯一の被爆建物で、一時は取り壊す話も出たが、リニューアルされて多くの人に休息場所を提供するだけでなく、被爆の実相を伝え、平和の思いを共有する場として意義深い施設となった。

特に3階は平和記念公園ができる前の中島地区の姿が模型やパネルなどで詳細に紹介されており、一瞬にして廃墟にした原爆の恐ろしさを痛感させる。

レストハウス（建物）の変遷も、1929年に市内有数の繁華街の一角に呉服屋としてモダンな姿を現したが、43年に国の統制令の影響で廃業し、被爆時は燃料会館として使用。強固なコンクリート建物のため被爆に耐え、被爆建物として改修を重ねながら市の東部復興事務所、レストハウスとして現在まで生き残る。この建物はまさに歴史の生き証人と言える。

地下1階にも初めて足を踏み入れたが、当時の不気味さが伝わってきた。

③ お知らせ：令和2年 響け！平和の鐘祈念式～大幅に簡略化して実施～

第6回目となる今年の祈念式は新型コロナウイルス感染の拡大防止のため実行委員会のメンバーのみで行います。簡略化した式典となりますが、8月6日に鐘を打ち鳴らすことだけは途切れないようにします。誠に残念ですが、ご理解いただきますようお願い致します。

詳細はHPを参照ください。ホームページ「響け！平和の鐘」<http://hiroshima-peacebell.org/>

(平和の鐘実行委員会代表 高東博視)

○ 広島復興の軌跡・人物編（第22回）～戦後日本の保健衛生行政に関わり、 広島復興過程に足跡を残したサムス准将～

～GHQ評価と歴史の一断面の交錯～

サムス准将(Crawford F. Sams Dr.、C・F・サムスとされ、1946年には少佐、1947年には大佐、1949年には准将として登場)という名前は、恐らくほとんど知られていない存在であり、広島復興過程に特別大きな役割を残したというわけでもない。しかし、この人の営為を知ることが歴史の大きな流れの中で、特定場面の解釈や多様な評価を可能とする場面に出会える機会を与えてくれると思われる(本文は敬称略)。

1. サムス准将と戦後日本の保健衛生行政

確かに日本が終戦を迎えときの保健衛生状態は最低水準であったろう。多くの子供たちはノミやシラミに悩まされ、状態の良い食べ物に恵まれず空腹を余儀なくされていた。米兵がチョコレートでも見せるものなら、子供たちは追いかけて行って、“Give me chocolate”と叫んでいたであろう。そしてGHQはこのような状態に対して、一方で衛生状態の改善に、一方で可能な限りでの食糧供給に乗り出してきたのであった。といっても、保健衛生政策は日本人のためだけというわけではなく、進駐してきたGHQ関係者自身の衛生状態確保も重大事であり、そのための配慮でもあった。



GHQ/SCAPの組織図で言えば、マッカーサー元帥を頂点とした連合軍最高司令官(SCAP)を置いて、片や軍政府があり、片や高級副官に率えられる民生部門があった。その民生部門には経済科学局や民生局、法務局等と並んで公衆衛生福祉局(PHW)を設立し、そこにトップとしてサムスを局長として送り込んだのである。サムスはイリノイ州生まれで、カリフォルニア大学で医学を学んだとされ、軍医として参戦後、陸軍省民事部のスタッフとして対日政策を立案し、その後マッカーサーの配下に入り、軍政局の公衆衛生・福祉関係を担当したという¹⁾。なお、公衆衛生福祉局は1948年2月現在、将校12名、下士官・兵2名、文官56名、日本人等の雇員22名、計92名が所属していたという。

ここで展開された象徴的な政策が、「DDT革命」ともいわれる医療福祉政策であった。C・F・サムス著、竹前栄治編訳「DDT革命」(岩波書店、1986)に詳しいが、予防医学としてのDDT撒布であり、性病の蔓延阻止、予防医学の導入、病院管理、ララ物資や学校給食による栄養改善といわれる。その頃の子供

たちは頭からDDTを撒かれたことになる。まさに戦後の日本人の衛生状態、食生活、医療改革を断行し、体位の向上や平均寿命の伸長に貢献したとされる。もちろんこれらの政策をサムス准将だけで推進したのではなく、組織的に進めたのであるし、これらの政策にもプラス面ばかりとは限らない。DDT撒布が人間の健康や安全性にとって有害であることが後に判明したし、その後の様々な環境汚染や医療問題の発生を食い止められなかったことなど反省すべきことも指摘されている。有無を言わせぬGHQの権力的な体質で進められたという政策の問題点もある。ということではあるが、当時のサムスとしては、その著において誇張した表現は認められるものの、専門的良心に基づいて最大限の貢献をしたと自負していたのであろう。

2. ABCC設立、整備の推進役

ここで、ABCCの設置とその設置場所の決定過程にサムスがどの程度関与したのかという問題がある。この件に関して、「広島市公文書館紀要第29号」(平成28年度)p.38において、中川利國元公文書館長は、「石丸はサムス准将が1948年12月28日にABCC建設用地の件で広島を訪れ、翌年1月4日に任都栗議長らが上京してサムス局長と面会したと整理している」と記述し、これに対してサムス局長のGHQに出張記録がないことから「12月下旬にサムス局長はどこにも出張していないことがわかる」としている。さらに「ABCCによる広島関係者との交渉については、当初は臨時所長のニールにより、後には所長のテスマーにより直接行われており、サムス局長が介入した形跡はない」と、悉くサムスの役割を否定的に捉えている。

この件を詳細に検討するには紙幅が足りないが、ABCC設置に関して言えば、サムス著の「DDT革命」によれば、すでに米政府の意思として「原子兵器の人間に及ぼす効果について、合衆国政府原子力委員会は、その研究を行なう契約を米学術会議と結んだ」²⁾とされ、当初サムス大佐が同年(1947年)1月31日、「放射能の人体におよぼす影響を半永久的に調査する必要がある」³⁾という報告書をワシントンに送っており、同年3月10日からABCCは広島で調査を開始し、1948年3月31日には広島ABCC内に厚生省国立の予防衛生研究所広島支所の開設に至っていることから、この段階におけるサムスの関与は否定できないはずである。

そして1949年1月20日付中国新聞によると、「GHQのサムス公衆衛生局長が広島市を訪れ、浜井市長に『原爆研究所』建設用地の早急な提供を申し出る。『広島市に新しい原爆研究所を建てる計画を進めているから早く土地を提供してほしい。この研究所ができて原子力の平和のために用いる研究をしたら各国の世界科学交流の土地になると思う』と述べた」とされる。すなわち、ニールやテスマーといった直接の担当者の存在があるとしても、これだけはっきりとサムスの建設用地提供の申し出があったとされる報道がある。これを無視して、サムスの関与を否定することはできないはずである。実は広島で早い段階でサムスの関与について記述した文献がある。それは坂本健順⁴⁾によって「十二月下旬GHQ公衆衛生福祉局長クロフォード・エフ・サムス准将がABCCの敷地選定の交渉の為来広した際、任都栗議長より広島市の戦災の惨状と、復興の困難なる実情、これの対策等について詳細懇談してその援助方を懇請結果、サムス准将より激励と能う限りの援助を與えるとの言葉あり」と記述されている。このように平和都市法制定の早い段階から記述されてきたことが悉く虚偽であろうか。出張問題と権限問題をそれぞれ冷静に判断していただきたい。

1949年7月14日には宇品町の旧凱旋館へのABCCの公式開所式が挙行され、そこにサムスが臨席し、「ABCCの研究結果が医学上、科学上の点について有益な研究発表をもたらすことを確信している(後略)」(1949年7月15日付中国新聞)と挨拶したとされており、これでも単なる形式的な介入といえないであろう。もちろん、サムスの介入問題よりも、そもそもABCCの研究の在り方はこれでよかったのか、という遥かに重要な問題が存することも指摘しておこう。

3. サムスからの書簡

ここで、かつて1987年11月6日付サムス宛にいくつかの質問をぶつける書簡を送ったら、同年11月17日付でサムスからの返信が届いた。ここでサムスに「1948年広島訪問を覚えているか」を問いただしたのであるが、その回答は

I discussed with Mr. Nitoguri on December 28th, 1948 my intention of establishing a research laboratory in Hiroshima and as Chief of Health and Welfare Section of GHQ SCAP I was responsible to General Mac Arthur for the operation of the Ministry of Health and Welfare and all activities pertaining familiar with the form of centralized power in the Japanese government and the desire of SCAP to decentralize power to prefecture and city governments. I invite him to Tokyo for a meeting on January 4, 1949 to put him in touch with the people funds from the proper agency of the Japanese to obtain such funds for his planning for reconstruction of Hiroshima. I discussed the problem with



1. The copy of my memoir will give you the reasons for my second visit to Hiroshima in December 1948 to select a site for the research laboratory.

2. I discussed with Mr. Nitoguri on December 28th, 1948 my intention of establishing a research laboratory in Hiroshima and as Chief of Health and Welfare Section of GHQ SCAP I was responsible to General Mac Arthur for the operation of the Ministry of Health and Welfare and all activities pertaining to health and welfare of the Japanese people. I was therefore familiar with the form of centralized power in the Japanese government and the desire of SCAP to decentralize power to prefecture and city governments. I invited him to Tokyo for a meeting on January 4, 1949 to put him in touch with the people in Government Section of GHQ SCAP who could assist him in obtaining funds from the proper agency of the Japanese to obtain such funds for his planning for reconstruction of Hiroshima. I discussed the problem with General Courtney Whitney Chief of Government Section of GHQ SCAP.

the General Courtney Whitney Chief of Government Section of GHQ SCAP.

ということであった。すなわち、サムスの書簡は1948年12月28日に研究所設立のために訪れて任都栗と議論したこと、1949年1月4日に東京に招待し、復興予算獲得のために適当な機関と折衝したこと、この問題でホイットニーとも議論したこと等、詳細を明らかにしたのであった。これ以上突き詰めないが、1949年訪問が「単に表敬訪問を行ったにすぎなかった」のではなく、ABC設立におけるサムスの役割は過少なものでなかった。問題はサムスの為したことの広島復興過程における意味を、歴史的な観点からさらに問うべきなのであり、再検討されるべきなのである。

サムスの勘違いだ、虚言だという反論もあろうが、ここではそこまで深く厳しく検討していない。サムスの書簡に基づいた歴史の記述から広島復興の一断面を提起するのが私の役割と思い、ここに一文を綴った。
(編集委員 石丸紀興)

脚注 1) 竹前栄治著「GHQ」(岩波新書、1983) p.131-132

2) C・F・サムス著 竹前栄治編著「DDT革命」(岩波書店)p.307、

3) 前2)p.309

4) 坂本健順著「平和都市生誕」(広島文化社発行、1950)p.6

□ ほっとコーナー

社会的距離と家族的距離

天 Writers 築島 渉

「コロナ禍」という耳慣れなかった言葉がすっかり定着するようになった昨今。イベントや海外関連のプロジェクトが多かった私にも、いろいろな変化があった。イベントは延期に、そして経営難に陥ったという海外のクライアントとのプロジェクトは中止に、と次々とスケジュールに空欄が増えていくのを呆然と眺める数ヶ月であった。

さて、我が家は中高生の息子2人と、私の父という4人家庭である。息子たちは思春期・反抗期真っ最中、風来坊の父は昨年脳梗塞を患い不自由があるにも関わらず、元気いっぱい毎日出歩くし、私は仕事にイベントにと家を留守にしがち、というのが我が家のデフォルト(標準)であった。夕飯時にはかろうじて一同が集まるものの、いわゆる「希薄な家族関係」を地で行っていたかもしれない。

そこに来てのコロナ禍と自粛要請は、家族の距離感を一気に変えた。自粛直前には、手からスマホを離さない中高生ふたりを「ずっと家にいたら良くない」という親理論で説き伏せ、一家総出で山や海へ出かけた。反抗期の男子、実に5~6年ぶりの快拳である。行き場を失った中高生が繁華街に出かけているという報道をたびたび聞いた自粛期間中には、息子たちは静かに家にいてくれた。「いてくれた」と書いたのは、彼らがカラオケだクラス会だと友達から誘いを受けるたびに、「うちのじいちゃん、糖尿病に心臓まで悪い高齢者だから、持って帰ったら絶対ヤバいからさ」とさりげんと言ったのけて、何度も誘いを断ってくれたのを耳にしたからである。(狭い我が家では押し入れの中が子供の基地になっているが、そこでの会話は本人たちが思っている以上に筒抜けだ)むしろ「原爆を生き抜いたから大丈夫」とばかりに出かけようとする祖父を説き伏せ、マスクと手洗いの重要性をお小言たっぴりに日々言って聞かせたのは、ティーンエイジャーの息子たちであった。

さて、狭いアパートで24時間一緒に過ごすようになった我が家で、息子たちは、あまり働いていないように見えていたらしい私が日々オンラインで会議をする様子を、そして気ままな祖父がいそいそと台所に立ち昼食の準備をする後姿を、初めて日常的に目にするようになった。一方私や父といえ、子どもたちが言われずとも(先生に叱られない程度に)勉強し、すすんで手伝いをするほどに成長し、そして尖らせた唇の後に家族への愛情を隠していることを、驚きをもって知ることとなった。

社会的距離をとることは、反比例的に、家族との距離を縮めていく。家族と向き合う時間ができたことは、この不安の時代、私にとってありがたい灯りとなった。

○ 広島市中央公園を考える⑮ (前号の続き)

まちづくりは変容する

— 広島中央公園の整備目標十か条の考察により見えてくること —

中国セントラルコンサルタント代表 前岡智之

何世紀にもわたって都市化は、世界中で一環したトレンドとして進んできた。世界中に蔓延を続ける新型コロナウイルスの出現は、これまでの習慣や社会常識を見直すことを私たちに迫り、まちづくりの変容のあり方まで考えさせられることとなった。

新型コロナウイルスのこれからについては、考え方が大きく2つあるように思える。1つは、治療法やワクチンが発見・開発されてやがて収束し、ウイルス発生以前の社会生活スタイルが取り戻されると考える方々。2つは、感染ウイルス等の脅威は今後ともあり続けるため、このことを前提として新しく社会生活スタイルを組み立てていくと言う方々である。

しかしこのたびの新型コロナウイルスの社会生活に与えた影響は計り知れなく、これまでの社会経済構造の大きな問題点が指摘された。まちづくりの選択にあたっては後者の立場を選択すべきと考える。

元より地球の温暖化や自然資源の枯渇など地球環境の維持・回復については警鐘されてきたし、その事は大半常識となっている。SDGs 持続可能な開発目標は、世界の目標であり、当然広島を目指すべき目標でもある。こうした目から広島中央公園の整備目標十か条（計画・整備はこれに照らしてから）を提案してきた。

ここまで提案・実施されてきた広島中央公園の4つのランドデザインについて<広島中央公園の整備目標十か条（計画・整備はこれに照らしてから）>に照らして評価すると色々と課題がある。これら浮き彫りになった問題点を抽出して**目指すべきランドデザイン**の考察に続けていく。

広島中央公園の整備目標十か条（計画・整備はこれに照らしてから） 評価

	石丸紀興氏提案の『広島中央公園のランドデザイン 2020』	日本建築家協会広島地域会まちづくり委員会の提案	市が進める広島プロサッカー場を有する広島中央公園案	丹下健三氏の広島平和都市建設構想案
① 世界平和を希求するひろしまの役割を果たしていけるか？	強調している	強調している	どちらかといえば市民向き	強調している（平和の工場）
② 都心公園として誰でもいつでも自由に利用できるか？	自由に利用できる	自由に利用できる	一部の人達に限られるしかも有料	自由に利用できる
③ SDGsの実現に同調していけるか？	同調する可能性	同調する可能性	全体として同調が困難	同調する可能性
④ ひろしまの復興エネルギーを後世に伝えるか？	強調している	可能性あり	伝えない	強調している
⑤ 予測出来ない自然災害や都市災害に対応できるか？	可能性あり	強調している	対応ができない	可能性あり
⑥ 都心地区の賑わいや利便性に貢献するか？	賑わいや利便性に貢献する	賑わいや利便性に貢献する	日常的には課題が多い	当時都心地区は未成熟だった
⑦ これまで、いま、これから感じさせるか？	強調	強調	流れの中におけない	新規の整備案であった
⑧ 既存の整備施設の再編と合理的に機能するか？	施設の再編に機能する	施設の再編に機能する	機能しない	新規の整備案であった
⑨ 平和記念公園と一体化する景色が形成されるか？	強調している	強調している	一体感ができない軸線を感じさせない	強調している
⑩ 半径1キロ以内の居住者の生活空間に組み込めるか？	基町団地を組み込む	基町団地を組み込む	住環境にはなじまない	当時基町団地存在しない

特徴的なのは、石丸提案は広島復興に関連する施設やアート作品の展示施設を配置するなど時系列な構成を持っている。また、日本建築家協会広島地域会の提案は、中央広場を災害時の対応や将来的な可変性について配慮し、公園全体を回遊性のある機能でつなぐことに特徴がある。丹下案は、提案が戦後まもなくであったため現在における評価ができない項目がある。

いずれの案も平和公園から中央公園に至る一体の提案であり、また将来に向けて広島の果たすべき役割をテーマにしている。

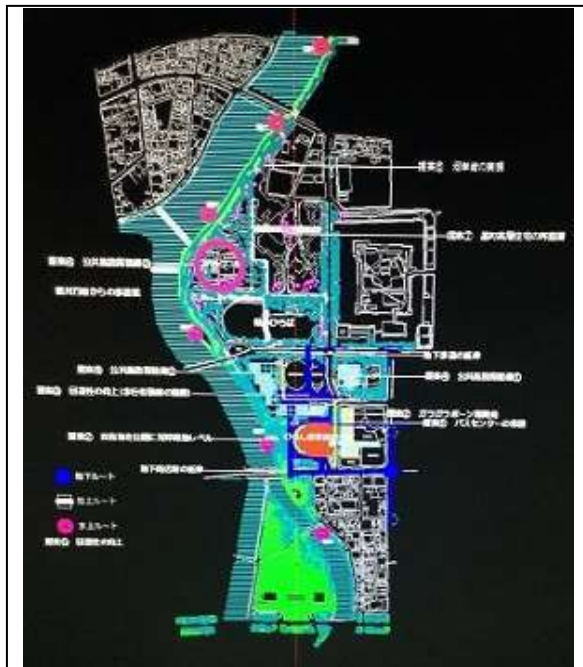
一方、市が進める広島プロサッカー場を有する公園提案は、サッカー場を中心とした公園の改造計画にとどまっており、ランドデザインによる世界に向けた広島の果たすべき役割については言及されていないし、むしろこの点を難しくしていると言える。

考察を試みた4つの『広島中央公園のランドデザイン』の概要

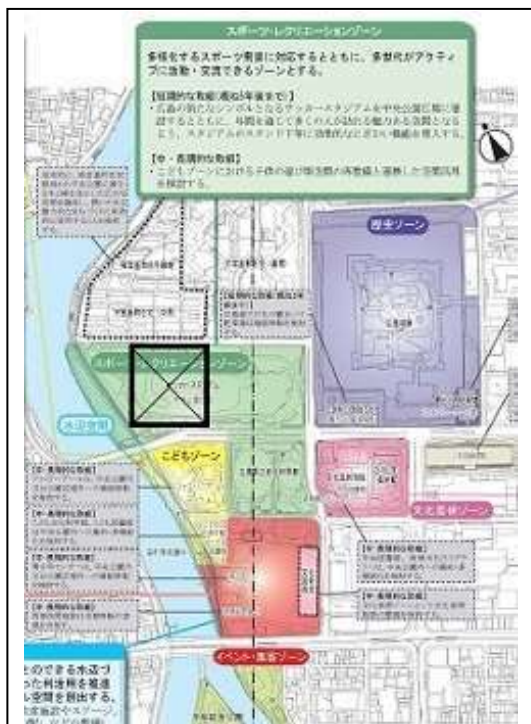
石丸紀興氏提案の『広島中央公園のランドデザイン 2020』



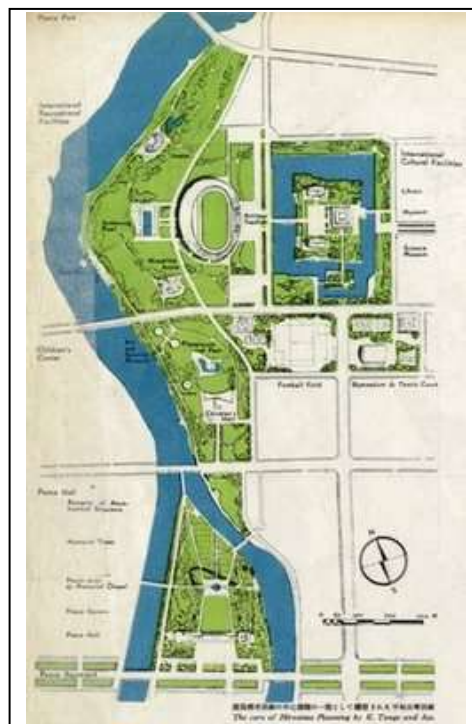
日本建築家協会広島地域会 まちづくり委員会の提案 (2017年)



市が進める広島プロサッカー場を有する広島中央公園ランドデザイン (2020年)



丹下健三氏提案の広島平和都市建設構想案 (1950年)



(続く)

街角ウォッチング

平和大通りを歩く

建築士 瀧口信二

平和大通りの西の新己斐橋から東の鶴見橋まで約3.5km、通して初めて歩いてみた。中央に車道（一部電車も）が走り、その両側に緑地帯と側道と歩道があり、その幅が百メートルもある。幹線道路としてではなく、防災道路（緑地帯）として計画された。

緑地帯には1957年から始まった供木運動により全国から、世界から多数の供木が寄せられ、今では立派に育ち、緑豊かな寛ぎの空間を醸し出している。所々に子供用の遊び場やポケットパークが設けられ、原爆慰霊碑なども点在し、まさに平和な通りにふさわしい。

大通りの東半分の北側に大型ホテルが5軒点在している。車寄せのため少しだけセットバックしているが、もう少しオープンスペースを設けて、市民に開放されていればよかったのに。

ANA クラウンプラザホテルの前には旧国泰寺の愛宕池跡が残り、和風庭園の趣がある。そのそばで毎月第3土曜日午後、空の下おもてなし工房によるカフェテラスが開かれ、無料でコーヒーが提供されている。



平和大橋脇の歩道より東側

敷地境界に多くのビルが建ち並びながら、唯一クリスタルプラザだけは前面に屋根付きのオープンスペースを設けている。奥にコンビニが入っているので、買い物後、ここで食している人も多い。空いていればだれでも自由に利用でき、私も一休みしてのどを潤す。風通しが良く心地よい。



クリスタルプラザ全景

目の前にラ・パンセ像が建ち、2018年、2019年と春先にこの周辺で平和大通り芸術展が開催された。木立の中にアート作品が置かれ、アートマルシェの市が立ち、祝祭日にはライブ演奏が聴けた。今年も楽しみにしていたが、新型コロナの影響で流れたようだ。



クリスタルプラザの前庭

南側の富士見町辺りの緑地帯では、毎日曜日に朝市が立ち、採れたての新鮮な野菜や魚介類などが店頭並び、すぐに売り切れるそうだ。

この平和大通りでは、1月には全国都道府県対抗男子駅伝が開かれ、平和記念公園前がスタートとゴール地点になり、全国の県人会の集まりで大いに盛り上がる。

5月の大型連休にはフラワーフェスティバルで全国から約160万人が集まり、例年大賑わいだ。12月の光の祭典ドリミネーションも若い人に人気があり、年末行事として定着している。また、カープの優勝時には、華やかにパレードが繰り広げられ、広島市民の喜びが爆発する。

平和大通りはもっともっと広島物語を語る場として日常的に活用しなければもったいない。そのためにも周辺にクリスタルプラザのようなアトリウムが増えることを切に望む。

お知らせ

被服支廠を未来に活かす会 キックオフ イベント

共に聞いて 語って 観よう！

■プログラム1：募金箱お披露目

旧陸軍被服支廠の建物保存と利活用のため200分の1の被服支廠倉庫の募金箱制作

■プログラム2：原爆詩人として著名な峠三吉作「倉庫の記録」の朗読会

ひろしま音読の会の3人による朗読

■プログラム3：切明千枝子さんと語ろう

母親が支廠に勤務のため支廠への想い強い。90歳の今でも被爆体験証言者として活躍

■プログラム4：映像「瓦礫の中から」(中国放送制作) 鑑賞

被爆40周年特別番組の映像。被爆直後から復興のために立ち上がった人々の証言集

- ・日 時：7月19日(日) 13:30~16:00
- ・会 場：RCC文化センター701号室(広島市中区橋本町5-11)
- ・主 催：被服支廠を未来に活かす会

代 表/三宅恭二(ジャーナリスト)

事務局/デザインオフィスカワハラ川原信子 nov-kawahara@deluxe.ocn.ne.jp

*参加希望者は、事務局メールアドレスに住所・氏名をお知らせください。

□ 編集後記

ものには始まりがあり今に至る。忘れてならないのはその変化の経緯である。

7月1日、平和記念公園内のレストハウスが観光施設としての機能を充実してリニューアルオープンした。1929年に大正屋呉服店として創建された当時の装いを再現する。

被爆によりこの建物は、屋根が下がり梁や床が破損して内部は全焼したが、まもなく木造で改修され、ここに東部復興事務所が置かれた。私はこの破損した残骸の上に改修された屋根裏に入った経験がある。よくぞ生き残った！また、よくぞ活かして利用している！と感激したことを思い出す。

私の馴染みがあるのは緑色の屋根を持った姿である。まさにここは広島の復興の発信源であり、当時の知恵とエネルギーを感じさせた。

平和記念公園のアイドルとも言われるべき存在であった。時間の経過の中で忘れてはならない側面ではなかるうか。

(編集委員 前岡智之)

***メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて
皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！**

(投稿は500字程度でお願いします)

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島21理事
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表